
Kevin Corrigan
Evagrius and Gregory:
Mind, Soul and Body in the Fourth Century
 (Ashgate Studies in Philosophy and Theology in Late Antiquity)
 Farnham, UK: Ashgate, 2009, pp. x + 245

土 橋 茂 樹

本書は、4世紀東方キリスト教圏に屹立する個性の異なる二人の教父、ポントスのエヴァグリオスとニュッサのグレゴリオスの神学および人間学を、両者が共有するプラトン（ないし新プラトン主義）という哲学的な源泉から比較考察することを目指す斬新で意欲的な試みである。著者コリガン（米国・エモリー大学教授）は、その主要業績（プラトン対話篇『饗宴』『パルメニデス』やプロティノス、さらにはプラトニズム一般に関する多くの編著¹⁾）からも明らかのように、プラトン哲学とその系譜研究を専門としており、本書が従来の禁欲主義的修道思想やカッパドキア教父学の専門研究書にはあまり見られなかったような哲学的創見に満ちているのも（その当否は別にしてだが）、ある意味では当然と言えよう。

歴史的に見れば、エヴァグリオスと関係の深い「グレゴリオス」とは、コンスタンティノポリスで彼が輔祭として仕え、師事していたナジアンゾスのグレゴリオスの方であって、ニュッサのグレゴリオスとの思想的類似性については、1930年代に Irénée Hausherr がその点に注目したものの、管見による限り、本書が最初の本格的モノグラフと言ってよいだろう。ただし、本書が証示しようとする両者の関係性・類縁性とは、必ずしも相互への直接の影響関係を跡付けることができるような具体的なものではない。一見すると対照的な二人の活動が、実は深い

1) *Plato's Parmenides and Its Heritage*, vol. 1 & 2, ed. with J. D. Turner, Atlanta, 2009; *Platonisms: Ancient, Modern, and Postmodern*, ed. with J. D. Turner, Leiden, 2007; *Reading Ancient Texts. Essays in Honour of Denis O'Brien*: vol. 1: *The Presocratics and Plato*, vol. 2: *Aristotle to Augustine*, ed. with S. Stern-Gillet, Leiden, 2007; *Plato's Dialectic at Play: Structure, Argument, Myth in the Symposium*, with E. G. Corrigan, Pennsylvania, 2004; *Reading Plotinus: A Practical Introduction to Neoplatonism*, Indiana, 2004.

ところで密接に関係し合っているというのが著者の見立てである。それがどのようなものかを知るためにも、まず、本書の構成から見ていくことにしよう。

全10章中、最初の2章は、エヴァグリオスとグレゴリオスの伝記的紹介（第1章）、および両者が関係した4世紀東方の教会史ないし教義論争史的背景の概説（第2章）である。この箇所は、当該領域を専門としない読者に本書を理解するための基礎知識を提供する序論的部分とはいえ、語られるべき事柄が漏らさず簡潔に纏められていて有益である。とりわけ、近年の研究動向を踏まえ、グレゴリオスと擬マカリオスの相互影響関係にまで十分かつ穏当な目配りがなされている点（pp. 18-20）は特筆に値する。いずれにせよ、コンスタンティノポリス公会議（381年）において共に正統派の論客として頭角を現した二人ではあったが、その後、道は分かれ、一方は高貴な既婚女性との恋愛沙汰から突然の出奔を経て、イェルサレム、ニトリア、さらに過酷な砂漠の地ケリアでの修道生活に沈潜し（エヴァグリオス）、他方は意に染まぬ小都市の司教職を務めながら、さしたる波乱もないままひたすら著述活動に専念（グレゴリオス）していくこととなる。奇しくも両者は、それぞれメラニアとマクリナという霊的感化力に秀でた女性から多大な影響を受けたが、当時の女性修道者の貴重な記録であるグレゴリオス著『聖マクリナ伝』の翻訳者らしく、著者コリガンはその点にも周到な考察を忘れてはいない²⁾。

続く第3章では、知性（ヌース）・魂（プシューケー）・身体（ソーマ）の関係という本書の副題にも掲げられた中心課題について、二人の見解が概観される。両者によるこれら三概念の統合的理解は、著者によれば、これまで近代的な心身理解によってややもすれば曇らされ、誤解されてきたという。エヴァグリオスを極端な禁欲主義的知性主義者と決め込む従来の解釈傾向は、その典型と言えよう。これに対して、両者が求める知性・魂・身体の統合的理解によれば、知性はその固有な機能に必須の基盤として経験と感情を含み、身体は人格の一契機として既に知解可能なものである。こうした多様な心身機能の統合的理解は、三一神の似像というキリスト教の人間理解とギリシア伝来の医術的及び哲学的人間理解をその源泉とするものであった。言い換えれば、非物質的な実体であると同時に、身体（物体）に生命を付与する形相でもあるという彼らの知性・魂理解は、プラト

2) *The Life of Macrina by Gregory of Nyssa*, trans. introd. and notes, Toronto, 1987.

ンの魂論とアリストテレスの魂論の単なる折衷の混合ではなく、むしろ、それら二つの魂論が聖書の伝統とストア派やプロティノスらのヘレニズム期思想を経ることによって深化・洗練された結果とみなされるのである。

4章では、両者によって提唱されたアパテイアの教説が考察される。魂から諸情念パトスを除去するというのがストア派由来のアパテイア概念であるが、著者は、それが否定的、欠如的な意味としてではなく、むしろ霊的実在と神の愛を認識するために必要な魂の解放であることを強調する。その点で、両者のアパテイア解釈は、ストア派からの影響というよりも、むしろ、プロティノスや（新プラトン主義を介しての）アリストテレスからの影響が大きく働いている点で類似性が見出されると結論づけられる。

続く5章から10章までは、一章ずつ交互にエヴァグリオスとグレゴリオスが論じられていく構成となる。まず第5章では、エヴァグリオスのいわゆる「八つの悪しき想念ロギスモイ」が吟味される。この教説は、後代の「七つの大罪」の源泉の一つとして大きな意味をもつが、著者は、この「八つの想念」の構想をエヴァグリオスがプラトン『国家』篇第8-9巻における国制の墮落形態論から読み取ったという大胆な仮説を展開していく。すなわち、まず『スケンマタ』において、想念に含まれる質料が皆無か、少しか、多いかという規準によって四対に分類された八つの悪しき想念を、著者は、『国家』第8-9巻の優秀者支配制から僭主独裁制に至るまでの国制の墮落過程の記述に基づいて、ヒュベレフアニア「傲慢」とケノドクシア「虚栄心」を名譽支配制に、アケーディア「嫌気」とテモス「怒り」を寡頭制に、リュベアー「悲嘆」とフィラルギュリア「金銭欲」を民主制に、ホルネイア「淫蕩」とガストリマルギア「貪食」を僭主独裁制に、というようにそれぞれの国制及びそれに相応する人間の生に割り当てていく。八想念の各ペアの前者が質料性の否定、後者が質料性の過剰を表しており、たとえば、民主制における生は、「悲嘆」すなわち失われた過去へのノスタルジーと「金銭欲」すなわち際限のない物欲の二重の圧力に屈して分裂し墮落するとみなされる。著者によれば、エヴァグリオスは、悪しき想念の各ペアがかかる質料性の相互不均衡によって、魂の分裂、墮落をもたらすと考え、神的な忍耐によってそこに均衡を回復することで、愛が生じ真のアパテイアに至ると説いたとされる。

第6章では、グレゴリオスにおける知性の墮落が考察される。プロティノスによって示されたように、悪は知性の質料性への墮落であり「美」そのものからの逸脱であって、秘跡によってしか再生はあり得ないとされる。この文脈において

グレゴリオスは「^{ロギスモス}想念」という語を「罪」の意味で用いるが、著者によれば、それは擬マカリオスを介して砂漠の修道靈性の伝統に繋がるものであり、この点でもエヴァグリオスとの共通性が見出される。第7章では、エヴァグリオスにとっての知性-魂-身体関係の諸相、たとえば可知的身体、身体概念と自己知、靈的感觉、さらに彼の形而上学等々が矢継ぎ早に（その分だけやや消化不良のまま）取り上げられる。第8章では再びグレゴリオスに戻り、三位一体論によって基礎づけられた彼の人間学が詳細に吟味される。グレゴリオスにとって、身体性の問題は、一方で三一神の似像として創造された人間存在の本質構成に関わり、他方で神の子の受肉に関わる最重要問題の一つであるが、著者は、そうした問題の解決のためにグレゴリオスが直接プラトン対話篇に取り組むことによって、逆にプラトン哲学のある種の完成にまで至ったことを示そうとする。著者によれば、グレゴリオスのプラトン理解が折衷主義的で不整合だとしばしば評されるのも、彼がそれぞれの対話篇ごとに異なる具体的な洞察をそのまま自らの思想に取り込んだからだとされる。いずれにせよ、両者の禁欲主義的修徳修業の神秘的道行きの最終段階が吟味される第9、10章に至ってもなお、両者が知性、魂、身体の統一の重要性を強調して止まないことが示される。最終章（11章）では、本書全体の議論が概観され、今後の研究の行方が展望される。

本書の最大の長所は、上述のように多岐にわたる両者の煩雑な議論を、アリストテレスに発し、プロティノス、ポルフェリオス、イアンプリコスを経て教父達に至る「聖書およびプラトン対話篇解釈の隠れた思想伝統」から読み直す一貫した解釈戦略にあると言ってよい（グレゴリオスが定型的に「我々」と呼ぶ時、こうした伝統の継承者としてカッパドキア教父のみならずエヴァグリオスをも含意しているというのが著者の揺るがぬ確信である）。4世紀東方教父にあって極めて興味深い特異な二人の思想家について、まるで合わせ鏡を覗き込むようにして構成された本書が、散漫な印象をさほど与えず、読者に良質な知的刺激を与えることができた要因もそこにある。しかし、同時に本書の難点は、まさにそうした構想の裏面にあるとも言える。実際、両者の類縁性は、著者が繰り返し指摘するほど実質的なものなのだろうか。むしろ、各々に均等な目配りを気遣うあまり、両者の比較総合に力が割かれ、せつかくの生産的な議論の多くが、深められぬままに終わってしまった印象が強く残る。また、本書のもう一つの大きなモチーフである従来固定化された解釈図式からの脱却という点についても、大胆なオル

タナティブの提示は議論を喚起する力に溢れており、本書が単なる解説書に終わらぬ所以であるが、同時に、そこに逆に著者の過剰解釈の弊が見出される傾向があるのも本書の小さからぬ瑕疵と言える。一例だけ挙げるならば、エヴァグリオスを知性主義から解放しようとするあまり、「アパテイアは愛を生む」(p. 159)と断定するのは、彼における修行論と観想論の關係に誤解をもたらしかねない。いずれにせよ、本書は未決の問いに駆動され続ける書として、我々読者がその問いを著者から引き受け、さらにオリゲネスとプロティノスとの関わりを引き込んだより大きな問いとして今後も問い続けるよう挑発し続けるに違いない。その意味で本書は、専門家にはもちろんのこと、専門外の方々にも是非とも読んでいただきたい(いささか大風呂敷な)啓発の書と言ってよいだろう。

Loris Sturlese

*Homo divinus: Philosophische Projekte in Deutschland zwischen
Meister Eckhart und Heinrich Seuse*

W. Kohlhammer GmbH Stuttgart, 2007, pp. XII + 263

加藤 希理子

本書は、マイスター・エックハルトを中心に、1250-1350年のドイツの思想的状況に光を当て、当時のドイツに固有の思想的潮流を明らかにすることを試みている。著者は、当時のドイツ思想界を牽引したのはドミニコ会であるとし、そのドミニコ会の中心地となったのがケルンであると位置づけている。著者は、当時ドイツで唯一の高等教育機関であったケルンのシュトゥディウム・ゲネラーレの注目度の高さに触れ、13・14世紀の指導的なドイツ人ドミニコ会神学者および哲学者はすべて、シュトゥディウム・ゲネラーレと関係していたと主張する。著者は、当時のドイツの思想界、とりわけドイツ・ドミニコ会が、アルベルトゥス解釈をめぐる二つに分裂していたことを指摘している。言うまでもなくアルベルトゥスは、広く西欧思想全体に多大な影響を及ぼし、アリストテレス注解者として、トマス思想の土台を構築したという点において重要視された。しかし、著